

伊勢御師の連歌話

— 醒睡笑・かさね草紙・蟄居紀談 —

小林 幸 夫

(一) 守武と宗祇

『蟄居紀談』(寛延二年成立)は、從來あまり注目されていないが、伊勢神宮の神官・御師のあいだに伝えられたと思われる話を載せており、連歌や俳諧について考えるうえでも貴重な資料となりうる。著者の川崎(度会)延貞は外宮権禰宜のかたわら、江戸に出て医術を学び、帰郷して医業をいとなんだ。ほかに『神境紀談』など多くの著作を残して、宝永十年に卒した。その『蟄居紀談』(巻上)に「宗祇連歌」という話を収めるが、ここからでも、論すべき説話の課題は見つけられる。

荒木田守武、岩井田尚重へ内宮物忌父¹が家にして連歌の会を仕たまひし時、修行者立寄て聞居たり。

おきんとすれば引ぞとゞむる

といふ句に人々付なづみて、「それなる修行者心あるさまなり、此句に付られかし」と云けるに、いなみけるを猶うちやまず云ければ、

ふしたかき松が根まくらかみかけて
と付たり。執筆前の句をくりかへし、輪廻たるよし云ければ
さゆる夜の賤がみどり子袖に寝て

伊勢御師の連歌話

と付ければ人々驚きぬ。時に守武、「そなたは宗祇法師にてはあらぬか」と云ければ、法師「さの給ふは守武神主ならずや」といふ。人々口を閉てぞ笑ひける。それより言かわしてゆきかふ事度々になりけるとかや。

内宮物忌父・岩井田尚重邸で行われた連歌の会。岩井田尚重は守武と同時代の連歌師で、伊勢神宮の「菜の花連歌」を管掌する神宮神官である。この連歌会は、毎年正月六日、内宮長官らを迎えて、岩井田家で興行された。前句に付け悩んだ連衆をしりめに、見物の修行者が付けてみせる。いわゆる笠着の連歌である。その句に感心した守武は、これを機会に旅の修行者・宗祇と交わりを結んだという。もちろん実話としては信ずるにたりないが、守武と宗祇に仮託された連歌話と考えればいい。『大筑波集』には「起きんとすれば引きぞとゞむる／みどり子の朝しも袖のうへに寝て」という付合がすでに見えている。だからこの話は連歌界の大立て者宗祇と守武の親交を語る逸話として、伊勢の連歌壇に伝えられたものと考えられる。

守武と宗祇に結びつけられて、連歌話が作りあげられる。もちろん伊勢神宮の連歌師にとっては、守武であってこそ、この話は興味あるものとなる。なんといっても伊勢の俳諧守武流の祖である。宗祇に相交わるのは守武こそふさわしいのである。守武の連歌話は、こうして伊勢連歌界で語りつがれてきたのである。一応はそうに考えられ

伊勢御師の連歌話

る。しかし、それも伊勢連歌壇という環境のなかにこの話を置いてこそ、納得できるものとなろう。連歌壇の詳細については、奥野純一氏の『伊勢神宮神官連歌の研究』にゆずって、伊勢と連歌の結びつきを説話論の課題として追いかけてみよう。

(二) 前句付の連歌話

額原退蔵氏が紹介した『伊勢俳諧聞書集』にも守武の付合が記録されている。

内宮西行谷連歌満座之後三人会合前句付

山伏の貝われ数珠のをかきれて

宗祇

いましめの硯の上に塵有て

宗長

われ笛のさらはさゝらに成もせて

守武

宗祇と宗長を交えた前句付の会、処は内宮近くの西行谷での連歌である。西行谷は世を逃れた西行が、草庵を結んで隠棲した処と伝えられる。のちに述べるが、室町時代からここで、都の連歌師も参会して、興行が盛んに行われた。そこでの連歌果てての俳諧が、この前句付である。この付合はさまざまなかたちで伝承されていて、『新旧狂哥俳諧聞書』（寛永末年成立）には、宗祇・宗長そして牡丹花の連歌話となっている。三人ともに風呂に入って付け合うという趣向である。

有時宗祇宗長牡丹花三人風呂へいりける。にたちすぎければ

ふくもふかれずするもすられず

と宗祇いひければ、「おもしろし、これに一句づゝつかまつらん」とて

われぶゑのさらばさゝらに成もせて

宗長

山伏の貝われ数珠のをはきれて

牡丹花

いましめの硯のうへのほこりにて

宗祇

この話を収める『新旧狂哥俳諧聞書』は、「俳諧寄合ひの雑談の席にて聞くところを筆記したものか」と考えられている。座興の遊び―前句付を都の連歌師に仮託するものそのひとつ―が、伊勢にまで運ばれていく。『蟄居紀談』の話に守武が加えられるのは、そこが西行谷だからである。伊勢での連歌であればこそ、守武を連れてこなければならなかった。類似の付合が『竹馬狂吟集』（明応八年序）に見えているが、

吹くも吹かれずするもすられず

割れ笛のさらばさゝらに成りもせて

と作者は特定されていない。本来は意味不明の前句に、句を続けて手柄を競う、それが前句付である。前句をうけて、それは割れ笛だよ、吹いても鳴らないし、かといってささらにもならない、そう解釈して付けたのである。したがって『伊勢俳諧聞書集』の場合も、宗祇・宗長・守武の付合は、「吹くも吹かれずするもすられず」を前句とする遊びである。遊びとはいえ、西行谷の連歌であれば、伊勢の守武こそふさわしい。こういう趣向をかまえたのは、もちろん伊勢の連歌師たちである。その作意が俳諧としてよこばれ、守武の機転が讀えられたのである。

信ずるにたりない連歌話でも、伊勢ゆかりの人物守武に結びつけて語り伝えられる。それは証拠（記念物）の残されている伝説とは異なつて、嘘と知りつつ笑い興じる「ハナシ」である。そしてこれもまたひとつの「俳諧の連歌」である。その俳諧表現のかたちを解きほぐしながら、連歌話の伝承の跡を探ってみよう。

(三) 西行の「うるか問答」

やはり『蟄居紀談』（巻上）に「西行負綿」の話を載せている。こちらは狂歌話であるが、連歌話の課題はここからも見えてくる。

西行上人いかなる用やありけん、打綿といふ物を背負て宇治ノ郷
櫓木館といふ者の前を通られけるを、館が内より見て「それはう
るか」といひければ、よぎりながらに

宇治川の瀬にふすあゆのはらにこそうるかといへるわたしはあり
けれ

とよめるとなん

宇治川は五十鈴川（御裳濯川）のこと。鮎については注釈が必要で
ある。鮎は伊勢神宮の「饗」となる、尊い神の魚である。毎年五月三
日、宮川に外宮の神官物忌父が出て、鮎をとる神事が行われる（御川
神事）。鮎の腸（はらわた）を「うるか」というが、それに綿を「売
るか」をかさねた秀句問答である。この言葉争いに勝って、西行の機
転の才は讃えられる。神の魚と尊ばれる鮎を用いた西行の秀句は、伊
勢の地にふさわしい俳諧として笑いを誘ったかもしれない。

この話は室町時代までさかのぼることができる。早く天文十六年頃
に写された『庭訓私記』（天理図書館本）の欄外注に、西行の「うる
か問答」が引かれている。

或河ニテ或女房綿ヲノハス。西行見テ、其綿売カト問ヘハ、女房
力狂歌ニ、

此河ヲ鮎取川ト知ナカラワタウルカト問ハヲロカヤ
ト誦ナリ。

このほかに蓬左文庫本『庭訓往来抄』、東洋文庫本『庭訓之抄』の
欄外注にも同じ西行の「うるか問答」を載せる。見て明らかのように、
西行が「その綿うるか」と問いかけると、綿売りの女房が言い返す。
室町時代の『庭訓往来』の注釈書にすでに見えているとすれば、この
話がどういう場で語られたのか、ぜひ知りたいところである。天理図
書館本の場合は「蟹味噌」、東洋文庫本と蓬左文庫本の場合は「鮎」
の注として引かれている。それを思えば、おそらく『庭訓往来』の講
釈の場で語られた説話であろうか。ならばどういふ人物がその講釈に

伊勢御師の連歌話

あたったのか、それもわからない。ともかく「蟹味噌」や「鮎」の注
釈としてのこの説話は、歌をとまって引かれている。西行が歌問答
に負ける説話は、注釈の場でどのような意味をもって語られていたの
か。別の機会に考えなければならぬ課題である。

注釈の場だけでなく、民間説話としても西行の「うるか問答」は伝
えられてきた。そのひとつは、神奈川県厚木市の「西行もどり橋」の
伝説である。

昔、西行法師が修行中にここに立ち寄りしました。そばに地藏堂が
あり、その地藏堂に法師が目をやると、一人の老婆が熱心に真綿
をかけていました。そこで法師は、

「おい、ばあさん、その綿をこの僧に売ってはいくまいか」

とたずねました。すると老婆は、小鮎川の鮎を歌題にして

「この川を鮎取る川としりながら綿（腸）を売るかと染井法師」
と短歌をよみました。この老婆の歌に法師がえす言葉もなく、す
ぐすこの橋を渡ってもどったので、その後、西行のもどり橋
と呼ぶようになり、近隣の花嫁はこの橋を渡らず民家の中を通っ
て嫁いで行ったとの事です。

「庫裡橋のそば」というだけで、その場所は不明であるが、地藏堂
のそばに架かる橋とあるからには、かつてそこは村の境であったと思
われる。そこにこの「西行もどり橋」の伝説は伝えられてきた。老婆
との言葉争いに負けて、西行が逃げ出すのだから「西行戻し」の話で
あり、この類の話は、全国に広く分布する。その源は、少なくとも室
町期の『庭訓往来』の注釈にまでさかのぼれるのである。『庭訓往来』
注には語られていないが、歌問答に敗れたのであれば、やはり西行は
逃げ帰ったのであろう。その意味では「庭訓往来」注の例も、「西行
戻し」の説話と考えるとよからう。おそらくは口語りの口承説話が、講
釈の場で、「引き歌」として引用されたものと考えられる。

(四) 宗祇戻し

こういう民間説話の運搬者について、初めて論じたのは柳田国男である。柳田翁は、「うるか問答」が綿売り女の話であるところに着目して、旅わたらいの女綿打ちが持って歩いたと推定した。口承文芸研究の領域に、民俗学的方法をもって切り開くべき沃野のあることを示唆した提言であった。この提言を受けとめて、口承文芸研究をさらに進展させること、それは困難ではあるが、その試みは今後も続けられるべきであろう。今の課題に即していえば、連歌（俳諧）話の生成と伝播、その視点からすれば、伊勢の「うるか問答」は、どのように伝承されてきたのだろうか。これは説話の性格を考えるうえで、やはり見逃せない問題である。

「うるか問答」ひとつとっても、その採話の数は少なくない。大島建彦氏が岐阜県美濃市で調査、採録された猿丸太夫の話をここにあげてみる。

猿丸は、生まれつき、はなはだ賢く、その才は今に伝えられています。少年のころ、アユを釣っての帰り道で、そのアユを売ってくれと言われ、

アユのハラこそウルカなれ、わたしやおやじの子でござる

と、即座に言い返したといひます。おやじにやるのだから売れないと言った程度の意味でしょうが、おもしろいことには、アユのウルカということばは、この時から使われるようになったと、土地の人々は言います。

さかしい猿丸少年が大人をやり込める。言い返して相手をやり込める点では、伊勢の西行説話と同じである。

京都府亀岡市小泉村の清泉寺には別の「うるか問答」が残されている。こちらは小式部が主人公である。清泉寺は現在臨済宗妙心寺派に

属し、本尊は観世音菩薩。本堂の左に高さ四尺ばかりの小式部内侍石塔が立つ。かつて私が訪れたときも、広くはない境内の片隅に、ひっそりと残されていた。寺には小式部の内侍の縁起が伝わるが、今は『新編 桑下漫録』から抄録して引用する。

（小式部が都へのぼる）途中、峠地蔵で、小式部の頭に綿帽子をきせてあったのを、丹波の魚商人が頭をなでて、「このわたうるか」と言ったので、小式部は、

早川の瀬にすむ鮎の腹にこそうるかといひわたくしはありけりと詠んだ。商人は大いに腹をたて、「ここな子めが」と言う、すぐに

あの山の萩やすすきの本にこそめかといひし鹿はありけりと詠んだので、商人も、ただ人ではないと恐れて行過ぎてしまった。

七才の小式部に大人がてもなくやり込められる。これも猿丸と同じであり、小式部のさかしい知恵を讃えるものである。このふたつの「うるか問答」は、厚木市の「西行もどり橋」とは異なり、いかにも歌人の伝承らしく、歌の才能を言挙げしている。幼いことを強調するのは、柳田翁がいうように、神童のごとき才能を、神の化現と感じたのである。

ところが「西行戻し」の場合は、西行が言葉争いに敗れて逃げ出すことになる。これは「宗祇戻し」についても同じである。宝暦三年に版行された俳書「宗祇戻し」にも「うるか問答」を記録している。

延徳の頃宗祇法師行脚の砌、白河の鎮守鹿島宮におゐて近域の大守達万句興行ありしに、宗祇野州の辺にて聞つたへ面^{おも}向けるとそ。鹿島の神、仮に賤女と現し給ひ、百会にはうれひと云へる綿を載き行過給ふを、「其わた売か」と宗祇問れしとなむ。女房、

阿武隈の瀬にすむ鮎の腹にこそうるかといへるわたくしはありけりと詠みければ、宗祇黙々として是より引かへされしとなり。此所

今に宗祇戻と云つたえて、風流の名なれば此書の魂とはなしぬ。

奥州白河での連歌興行のとき、賤女に姿をかえて顕れたのは鎮守鹿島明神、その神との応酬に敗れて宗祇は逃げ帰る。それよりこの地を「宗祇戻し」と言い伝える。「西行戻し」と同じ伝承である。これに類する宗祇の伝承は、『白川関物語』などにも記録されているという。

同じく「うるか問答」にしてもふたつの型があるようだ。猿丸や小式部のように、神童のごとき歌の才能を讃えるもの。それに対して「西行戻し」や「宗祇戻し」のように、言葉争いに敗れてもなく逃げ出すもの。とすれば伊勢の「うるか問答」も決して特殊な伝承ではないのである。二つの型はともに同じ歌人伝承とはいえ、伊勢では西行を勝利者として、歌の才能を讃えてきた。俳諧の盛んな伊勢では、こんな狂歌話でも、嘘と知りつつ笑ってきたのである。この話もまた伊勢が育てた俳諧である。つまり伊勢の「うるか問答」は、連歌（俳諧）師の手を経て伝えられたのである。

(五) 御師と俳諧の連歌

松永貞徳が書きとめたとも考えられている『寒川入道筆記』（慶長十八年筆録）に、連歌師元理と三好長慶の連歌話が収められている。

三好修理大夫殿にて御会の過に、俳諧の発句御所望、折節御前二有合人々ハ皆々入道なり。御俗体ハ大夫ばかり。比は十月なれば、そのまゝ、

お座敷を見れば大略神無月 元理

ひとりしけれのふるゑほしきて 大夫殿長慶朝臣

長慶邸での連歌会、座につどった連歌師はすべて法体、つまり剃髪している。ひとり長慶のみ有髪で烏帽子を着している。時は神無月の時雨する頃。連歌の座の情景を詠んだ即興の一句、何ということもない秀句である。

伊勢御師の連歌話

この類話が『蟄居紀談』（巻上）に「宗祇狂句」として載っている。

神無月の頃益三郎大夫宗祇を招き請て連歌の会をぞ仕りける。連衆皆法体にして亭主一人束髪なりければ、

御座敷を見ればいづれもかみなづき

と宗祇いはれける。三郎大夫聞もあへず、

ひとり時雨のふるゑほしきて

こちらは宗祇と外宮の御師、益三郎大夫の付合となっている。御師の正装は烏帽子着用、ひとり三郎大夫のみ有髪である。「神無月」に連衆の法体姿、「髪なし」をかさねて遊ぶ。その趣向は『寒川入道筆記』にひとしいが、益三郎大夫との付合となれば、宗祇にも劣らぬ付合の腕を誇る話に変わる。益三郎大夫はもちろん、『蟄居紀談』を編んだ川崎延貞も神宮の御師であれば、この連歌話は、彼ら御師のあいだに語り伝えられた話と考えてよからう。西行の狂歌話であれ、守武の連歌話であれ、自分たちの誇るべき先輩として、彼らの俳諧の手腕と手柄を語り伝えたのである。益三郎大夫の話も、そんな気味が感じられる。

神宮の御師たちは、諸国の檀那場をまわりながら、連歌や俳諧の座につらなつて、こういう話を語っていた。そう考えても、あながち空想とはいえない。そのことは『俳諧草庵集』（元禄十三年刊）の西山宗因の俳諧が示している。

西行谷連歌両宮神主中に西山宗因連座みちてかへるさに申かけし

みなえぼし中に独や神無月 慶彦 権禰宜正位渡会

即答ふところより取出て、

さらば頭巾をかぶる夕ぐれ 宗因

外宮神官度会慶彦との俳諧である。伊勢に赴いた宗因を迎えて、西行谷での連歌興行の果てたあと、俳諧に遊んだのである。これは「古烏帽子」の俳諧連歌と同じ発想である。おそらくふたりともに、古い類句のあることを承知のうえで、こういう付合を楽しんだのであろう。

伊勢御師の連歌話

この手の連歌話は、彼ら連歌師の耳囊のなかに、いくつも蓄えられていたのである。彼らはそれを携えて、諸国をわたり歩いたのである。西行の「うるか問答」も、その手の話のひとつである。伊勢神宮の御師は、伊勢信仰を宣伝するとともに、連歌話も持ち歩いていたのである。連歌（俳諧）の席につらなるとき、それらの話は雑談のタネであろう。それならば『蟄居紀談』に、連歌や俳諧に関する文雅の話が多いのもけつして不思議ではない。

(六) 京と伊勢

京と伊勢との間を連歌師は往還した。荒木田守平の編んだ『二根集』（文祿四年成立）の間書からも、それは窺い知れる。そこには神宮の連歌師が、都の貴顕・連歌師から聞き伝えた知識が記録されている。彼らの旅とともに、連歌の知識や情報が運ばれるなら、連歌話も往還する。

安楽庵策伝の『醒睡笑』（巻之八・茶の湯）に、西行の狂歌話がある。

西行法師、伊勢の宇治に住みける時の歌、

これにも異伝があって、鴨長明の歌とも伝えられる（『三國地誌』）。もちろんどちらにも信ずるにたりない。喜撰法師の歌（『古今集』巻十八）を本歌として、戯れに遊ぶところに、この話の本旨はある。戯れなのだから、作者の名は自在に取り替えられる。したがって『新撰狂歌集』（巻上）には、この歌を「祈念法師」の作とする別伝が紹介されている。宇治の茶を話題にして言葉遊びに興じた雑談の座があったことを、かつて私は、この話を取りあげて論じたことがある。連歌や茶の湯の席での、本歌を話題とする雑談が記録されていると考えたのである。

この西行の歌が、早くに伊勢でも記録されている。神宮の神官度会元長が編んだ『詠太神宮二所神祇百首和歌』がそれで、応仁二年（一四六八）成ったとされている。

春二十首 立春

神ノ代ノ春ヤタツミノ宇治ノ山都ノ空モ今朝カスムラン

天照皇太神ハ地神五代ノ尊ニ坐ス、然者五代ノ春ヤ立ラント也、

御鎮坐ノ山都ノ巽ニ是アタレリ。西行此宇治ニテ読ル歌

愛モ又都ノ巽シカソ住山コソカワレ名ハ宇治ノ里

伊勢神宮に奉納する法楽和歌なのである。宇治山の春を詠んだ歌にちなんで、西行が草庵を結んだ西行谷での歌が紹介される。ここに室町時代から神宮の神官はもちろん、都の連歌師たちが訪れて、しきりに連歌興行が催された。江戸時代に入ってもそれは変わらず、岩井田家の月次連歌の会には、西山宗因もつらなっている。

慶安元年（一六四八）、里村昌隱を招いて興行された『勢州宇治西行谷神照寺手向之千句写』（名古屋大学図書館皇學館文庫蔵）は、西行ゆかりの地で催された追善興行である。

此千句は神照寺の手向におもひ立侍り。西行法師の旧跡と世をへていひ伝へたり。さればいにしへの人々も和歌もて遊び給ふは、爰に尋来て心々の手向ありし也。又連歌の好士たちもあまねく此所におはして発句しをきたまへり。予も一見せし時、此所をいかでか西行法師の庵室の跡とは云ならんと問ひ侍れば、こどもまた都のたつみしかぞ住山こそかはれ名は宇治の里と、かの西行のつらねおかれしうへは、是に閑居をしめられしこともかくれなしと云へり。

西行法師の旧跡で、その追善のために連歌は手向けられる。その時、「こどもまた都のたつみしかぞ住山こそかはれ名は宇治の里」の歌は、妻子を捨ててこの地に草庵を結んだ西行のことを思い起こす「たより」とされたのであろう。まさに西行谷は、西行追憶の場であった。そこ

で催される連歌もまた、西行をしのぶ「よすが」となったのであろう。それがこの『手向之千句』である。

『醒睡笑』（巻之八・茶の湯）に収められる西行の狂歌話も、連歌の席の話題なのである。『勢陽五鈴遺響』（度会郡）によれば、西行谷神照寺には、「ここもまた都のたつみしかぞ住山こそかはれ名は宇治の里」の歌を刻んだ扁額が掛けられていたという。ここに集った連歌や俳諧の連衆は、この歌を「たより」にして、西行のむかしを偲んだのであろう。あるいはこの狂歌を西行の形見と信じて、連歌の座で語りついできたのであろう。

（七）連歌師の往還

京と伊勢をむすぶ連歌師の往還、交流の実態は、『二根集』などを資料として、奥野純一氏によって明らかにされた。詳細はその仕事にゆずって、ここでは『かさね草紙』と安楽庵策伝周辺の資料によって、彼らの往還の跡を伊勢の側からたどってみよう。

北野の玄陳正月元日の発句に

春やけふつぼみにこめし梅の花

とありければ、春やけふの五文字あしきよし京わらんべ申あへりければ、案のごとく一条より下りに焼にけり。京わらんべ詠みはんべり。

春やけふとうらなひあてし玄陳は連歌をやめて算置きになれ

とありければ、玄陳面目うしなひけるとなり。

ここにいう「一条より下り」とは、おそらく新在家から一条小川辺りであろう。連歌師や茶湯者の住まいがあり、宗祇や紹巴もかつてここに住んだ。また「玄陳」とは北野の連歌師里村玄陳のことである。里村紹巴の嗣子・玄仍の長男、天正十九年に生まれ、寛文五年に七十五才で没した。この話は彼に対する京わらんべの悪口である。めでた

伊勢御師の連歌話

い祝言の連歌で、「春やけふ」（春焼けふ）のように「焼く」に通ずる語を用いるのは不吉である。連歌師をやめて算置きにでもなれという。一条辺りの火事は、玄陳の「春やけふ」の五文字が「悪しき」ゆえだという。禁句を用いた縁起の悪い句だから焼けたのだという。お前の句のせいで新在家辺りが火事になった、おかげで焼け出された、というのは、根も葉もないでたらめであらうが、棘のある悪意が含まれている。

こんな話が伊勢にまで流布したのは、おそらく里村家の確執がその背景にあらう。里村家は昌休の死後、昌叱の家系（里村南家）と紹巴の家系（里村北家）に別れる。前者は昌琢、昌程と続き、後者は玄仍、玄陳と続く。前出の昌隠は南家である。南北両里村家は、互いに婚姻関係や養子縁組を結んで、連歌界での地位を確固たるものにしていった。

寛永五年、南家の昌琢が幕府連歌宗匠の地位に着いて以来、その勢力は南家に傾くようになる。伊勢神宮の連歌壇は、これを期に幕府の連歌宗匠たる南家との結びつきを深めていく。奥野純一氏によれば、寛永期の昌琢にはじまり、貞享期の昌程・昌陸・昌純・昌億にいたるまで、南家の連歌師は伊勢を訪れて連歌興行を行っている。昌隠の西行谷追善千句興行も、その流れのなかで興行されたのである。

以上のような南家と神宮連歌壇の結びつきを思えば、先の玄陳の話も、南家と北家のあいだにある確執、あるいはわだかまりの一端を語るものではないか。北家の宗匠玄陳の悪口が、京わらんべの口ずさみというかたちで伊勢に伝えられたのであろう。南家の連歌師の運んできた話が記録されたと思われる。

さて里村両家の連歌師とも安楽庵策伝は、親交を結んでいた。『策伝和尚送答控』には、南家の昌琢・昌俔、北家の玄陳・玄的との贈答歌が記録されている。玄陳との贈答歌をここに引いておく。

おもひやる心の色のふかきをもうす紅葉とや人の見るらん

策伝

伊勢御師の連歌話

返し

心ありてたをれる枝の紅葉々はほかにさきだつ色とこそみれ 玄陳
この一例だけをもって断定はできないが、ほかに『かさね草紙』と『醒睡笑』とに共通する話（たとえば一休話のそのひとつ）を考えると、里村家の連歌師を介して策伝は伊勢と結びついている。策伝のもとへ、彼らを通じて伊勢の情報がもたらされたと思われる。前述の西行谷の狂歌話が、『醒睡笑』に収められたのも、その情報源は、里村家の連歌師であろう。彼らは京と伊勢を往還して、玄陳の連歌話をも運んできたのである。

（八）連歌と寄合話

『かさね草紙』の説話は、神宮連歌壇と結びつき、その連歌話は、神官を含めた御師のあいだに語り伝えられたものである。したがってその話には連歌の刻印が押されている。寄合話の知識が、連歌話のなかにはめ込まれているのである。それを『かさね草紙』を例にとりたしかめてみよう。

有時、伊勢山田火事ゆきければ、そうたんも家を焼きけり。そうたん山田三方の肝煎にてありけれども、誰とむらふべき人もなし。余につれなく思ひて詠めり。

山田もるそうたんが身こそかなしけれ焼けはてぬれどとふ人もなし

と詠みければ、そろ／＼焼けとむらいよりけるとなり

『かさね草紙』に収められる七つの「そうたん」話のひとつ。この人物の詳細については不明である。「そうたん」と「そうかん」の類似から、山崎の宗鑑に結びつけられもするが、結びつけるだけの資料があるわけではない。ただ「そうたん」が、「山田三方の肝煎」であるという記事は、この話を読むうえで役に立つ。つまり彼は伊勢の師

職なのである。

伊勢の師職家は、①宮司家 ②神宮家 ③（イ）会合年寄家（内宮）（ロ）三万年寄家（山田） ④町年寄家（山田）、そしてその下に⑤平師職 ⑥殿原 ⑦仲間などの厳格な階層組織からなる。山田三方家は、外宮の御師として経済的・政治的実力を有するものであった。もちろん彼らは、連歌の席にもつらなる教養人でもあった。しかし、この「そうたん」なる人物は戯画化されている。山田の火事で焼け出されたとき、誰も見舞いに来る者がなかったので、「そうたん」が右の歌を詠むと、火事見舞いの人が集まったのである。一見戯画化されているように見えるが、これを「そうたん」への誹謗と、単純に読むべきではない。歌を詠んだ結果、見舞客が来たというのだから、歌徳説話のかたちをとっている。滑稽味をまじえて、「そうたん」の歌の手腕を讃えるかたちなのである。

ところでこの「そうたん」の歌には本歌がある。「統古今集」（十七・雑上）「備中国湯川といふ寺にて、僧都玄寶」と前書きする

山田もるそふづの身こそ悲しけれ焼けはてぬれば訪ふ人もなしがそれである。玄寶僧都の歌で、『古事談』や『発心集』の説話が、その本説である。『奥義抄』や『顯注密勘抄』、そして謡曲『三輪』にも、故事が引かれていることを思えば、歌の世界でも著名な説話であったようだ。玄寶は、南都第一の高僧。名利を嫌い、三輪山の麓に通れ、大僧都に任じられたとき、備中の国湯川の山寺に隠れたという。

『兼載雑談』には、この歌を引いて次のように述べる。

山田もるそうづの身こそ悲しけれ秋より外はとふ人もなし

玄寶僧都の歌也。田のかゞしをそうづといふ事はより始るなり。

玄寶は称徳天皇の時の人なり。此の歌子細あり。

「山田のかがし」の由来をこの歌にもとめているのである。玄寶僧都の説話は、連歌師のあいだでも周知のことであったようで、寄合集『流木集』にも載せられている。

一、ひた 秋の田のおどろかし也。板をかけて木を引きあて、鹿を驚かすを云ふ也。ひた引く共、ひたのかけ縄とも読めり。又山田の僧都と云へるも同じ物也。歌に僧都とよまれたれ共連歌には如何。未不及聞。玄寶僧都のしめたる故に僧都と云ふ。

なお参考までに引けば、『連珠合璧集』には、「そうづトラバ 山田 秋はつる 横川」、「類松集」には、「僧都 山田 三輪の山陰 横川」という寄合語（付合語）がならんでいる。連歌の世界では、玄寶僧都の故事と歌は、寄合語の知識として周知のことであった。

それならば「そうたん」は、世を逃れて三輪山の麓に隠れ住んだ玄寶僧都に、我が身を比しているのである。玄寶僧都の故事を本説とした戯れの歌、このおかしみが「そうたん」の話には仕組まれているのである。歌や連歌の知識を前提としたこの連歌話（狂歌話）を理解できたのは、連歌師であり、神官、御師たちである。

彼らがつらなつた連歌の席は、話が生まれ育てられる処である。『かさね草紙』は、伊勢の御師が語り伝え、各地の檀那場へ持ち運んだ話の筆記であろう。伊勢神宮神官、御師の連歌（俳諧）活動の跡を伝える記録といっている。都と伊勢の連歌師の交流を伝える資料としてはもちろん、口承文芸研究のための貴重な記録として、今後活かされるべきであろう。

(注)

- (1) 『荒木田守武集 増補改訂』所収「荒木田守武翁伝」。蘭田守良『神宮典略』（神宮連歌）大神宮叢書所収
- (2) 頼原退蔵「犬筑波集鑑賞」（『頼原退蔵著作集』第二巻所収）
- (3) 『初期狂歌集』（近世文芸叢刊7）野間光辰解説
- (4) 『宇治山田市史』（上巻）
- (5) 小助川元太「庭訓往来注と雑談——庭訓私記」の注釈説話を中心に——（日本文学研究誌『枯野』第十二号）

伊勢御師の連歌話

- (6) 『西行伝説の説話・伝承学的研究』（平成十年度～平成十二年度科学研究費補助金 基盤研究（C）（1）研究成果報告書・研究代表者・木下資一）

- (7) 柳田国男『女性と民間伝承』

- (8) 大島建彦「狂歌咄の伝承」（『ことばの民俗』所収）

- (9) 永井尚編『新編 桑下漫録』南郷書房

- (10) 奥田勲『宗祇』

- (11) 鈴木棠三『醒睡笑』（角川文庫）解説

- (12) 尾形仿「宗因と伊勢—守武風・談林派の接点—」（『俳諧史論考』所収）

- (13) 目崎徳衛『西行の思想史的研究』

- (14) 小林幸夫「狂歌咄西行論—茶数寄と歌数寄—」（『咄・雑談の伝承世界—近世説話の成立—』所収）

- (15) 尾形仿前掲（12）論文。野間光辰「連歌師宗因」（『談林叢談』所収）

- (16) 奥野純一「伊勢神宮神官連歌の研究」

- (17) 奥野純一編『二根集』解説

- (18) (19) 奥田勲「連歌師」。里村両家の確執については乾裕幸「俳壇確執史の源流」（『周縁の歌学史』所収）に触れられている。

- (20) 奥野純一「伊勢神宮神官連歌の研究」

- (21) 『醒睡笑』（巻之六「推はちがうた」）に一休の「きたりとよこころの内の墨染めを世渡り衣うへにこそきね」の歌を載せる。一方、『かさね草紙』には、「あるそとよこころのうちは墨染めの世渡り衣うへにきすとも」という歌がある。いずれも伊勢・宇治山田での話である。

- (22) 越智美登子「『かさね草紙』——近世初期狂歌咄の一資料——」（『論集 日本文学・日本語』4近世・近代）所収

- (23) 奥野純一編『二根集』解説。越智美登子「初期伊勢俳壇の問題」

伊勢御師の連歌話

〔国語国文〕四二八号所収

(24) 越智美登子前掲(22)論文

本稿は平成十六年度、平成十八年度科学研究費補助金による研究成果の一部である。

(本学教授)